3

連載エッセイ

樹のちから

石川 幹子
いしかわ みきこ
東京大学大学院工学系研究科 教授

人にも様ざまな能力があるように、樹木にも、異なったちからがある。成長が早く、すぐに役立つ樹木もあれば、大器晩成の言葉のごとく、遅々として埒のあかない樹木もある。

前者の筆頭は、おそらく、ニセアカシア(Robinia pseudo-acacia)であろう。マメ科の樹木で、成長が早く、樹高は、20～28mにもなり、樹林のなかで群を抜く高さを誇る。痩地でも育ち、根瘤菌が土壌を肥沃にする。しかし、概して寿命は短く、50年ほどすると幹に洞ができ、風で倒れ、思わぬ被害をもたらすことがしばしばある。

かつて、砂防工事が行われた山間の渓流などを歩くと、思いもかけない所で、このニセアカシアに出会うことがある。おそらく、昭和30年代頃、戦後の国土の荒廃の後、早期緑化の目的で全国一斉に植樹された時代の名残であろう。幹は朽ちつつあるものの、地下茎から伸びた新しい樹木が育っている。この生命力の旺盛さが、現在の在来種を尊重する考え方のなかで問題となり、駆除の対象とされるに至っていることは、時代の流れとはいえ、複雑な思いを禁じえない。

ニセアカシアとは、誰が名付けたのか、気の毒な名前である。羽状複葉の葉は、じつに軽やかで、樹下には優しい木漏れ日が戯れる写真-1。初夏には、梢高く、真っ白な房状の花を咲かせ、その芳しい香りは、気品に満ちている。

ニセアカシアといえば、「アカシアの大連」が名高い。大連のアカシアは、正確には、ニセアカシアである。美しい港を臨む丘の並木道に咲き誇っていたニセアカシアは、古木となり、朽ち果てようとしている。戦前の日本人街は、現在、急速な再開発の波に洗われており、2週間前にあった住宅地が瞬時にして消え去っているのが現実である。あたかも、地震の後のような瓦礫の中で、ニセアカシアが奇跡のように残されていた写真-2。樹木に罪はない。ニセアカシアにも、適材適所を生かした生き残る道を考えるべきと思う。

これに対して大器晩成型の樹木の筆頭は、おそらくビャクシン(Juniperus chinensis)であろう。仙台の生家の庭に、いつのころ植えられたかは不明だが、ビャクシンの古木がある。私の子供の頃から、ほとんど姿・形は変ることはない。花が咲くわけでもなく、格別、おもしろみのある樹木ではないが、独特の存在感を有し庭を

写真-1 軽やかなニセアカシアの葉と樹形(2009年5月、大連)

写真-2 旧日本人街に残されたニセアカシア(2009年5月、大連)

写真-3,4 鎌倉建長寺のビャクシン

写真-5 松島瑞巌寺のビャクシン

席捲している風格があった。明治の人であった祖父は、この庭をこよなく愛したが、近づきがたい威厳があり、そのイメージがビャクシンと重なり、この樹は、私にとって一歩退き、遠くからみていた存在であった。

長じて、再びビャクシンにめぐりあったのは、鎌倉五山の一つ、建長寺であった。ここには、開山大覚禅師蘭渓道隆が、宋の禅寺にならい植えたとされる巨大なビャクシンがある写真-3,4。樹齢730年を超える古木は、山門を凌駕するほどであり、うねりながら龍のごとく空に登っていく勢いのある姿は、質実剛健を旨とし、かつ精神世界を極めようとする禅寺の高い志を映すものと思えた。

同じく禅寺である、松島瑞巌寺門前にもビャクシンの古木(推定樹齢700年)が、名勝として保存されている。戦国の武将、伊達政宗の建立した寺であるが、その前身は建長寺の姉妹寺である丹福寺であり、禅寺の伝統が、この樹を通して東北地方に伝播されたのかもしれない写真-5。

中国のビャクシンのルーツに巡りあったのは、約10年ほど前である。何気なく訪れた北京の故宮の最も奥の院の庭が、ビャクシンで占められていることに出会い、「なるほど」と合点がいった。

この時から、私のビャクシン探訪の旅が始まった。この樹に込められた物語を、辿ってみたいと心を決めると、ビャクシンは、おもしろいように様ざまの風景のなかに立ち現れるようになった。

世界遺産に指定されている安徽省宏村では、最も重要な廟の門前がビャクシンであった。奇岩で名高い張家界に隣接する村でも、廃村となり、すべてが失われたなかで、ビャクシンのみは伐採されることなく、かつての村の中心に鎮座し続けていた写真-6。最南端は、台湾の台南市である。戦前、日本がつくった植物園は、現在、台南公園として親しまれているが、ここにビャクシンの古木がある。説明を読むと、1901年に試験的に日本から導入されたとある。ビャクシンは、「龍柏」と表示されており、龍が昇っていく勢いのある姿が愛されているという。中国から伝承された龍柏が、日本を経由し、さらに台湾に根を張っている。

日本から、最も離れた地は、スペイン、グラナダのアルハンブラ宮殿である。イスラム文化の粋であるこの宮殿には、回廊をめぐらした小さな庭園が、迷宮のように連なっている。最も奥の皇帝が暮らした庭園に、ささやかに、しかし、力強く鎮座していたのがビャクシンであった。

ユーラシア大陸を横断して聖なる樹として生き続けるビャクシンであるならば、きっと、「ビャクシンの道」があるに違いない。一人の学生がイスタンブールにいくという。私は、すかさず、トプカプ宮殿に行き、ビャクシンの存在を確かめてきてほしいと頼んだ。トプカプ宮殿は、15世紀から19世紀まで、オスマントルコの皇帝が居住したボスポラス海峡を望む美しい宮殿である。東西文化の十字路であるこの宮殿には、きっとビャクシンがあるに違いない。

帰国した学生が、いささか上気した声で、こういった。

「先生、ありました。たしかに、ユニペルス・　キネンシス(Juniperus chinensis)です。」

松島、鎌倉、北京、台南、安徽省、四川、イスタンブール、グラナダ……

ユーラシア大陸を横断して生き続ける「樹のちから」。

地味な一本の樹に人は、かなわぬ「永遠の命」を託したのであろうか。

写真-6 中国張家界近くの廃村に残された一本のビャクシン(2008年5月)